

東郷文弥節人形浄瑠璃



鹿児島県薩摩川内市東郷町の文弥節人形浄瑠璃は、いつの頃から行われたものかははっきりしないが、元禄11年（1898年）頃参勤交代の折、島津氏の随行役をしていた東郷の郷土が、郷里の子弟の士気振作にと上方（京都・大阪地方）から文弥節の師匠を連れ帰り広めたものといわれ、また一説には寛文10年（1670年）頃江戸より連れ帰ったともいわれている。江戸時代から現存している18体の人形中、東雲の頭の内側には「寛政元年酉（1789年）大磯作也」という墨書があり、歴史的に約3百年以上の伝統のある郷土芸能である。

本市の文弥節人形浄瑠璃は、東郷町斧淵の三ヶ郷集落の郷土たちによって伝承され、例年神社に奉納したり、秋の収穫後のお祭りなど娯楽を兼ねて、竹や丸太で茅葺きの野外劇場を作り催していたほか、個人的にも結婚式や新築祝い等にも頼まれて演じていた。

昔から「人形踊り（おどい）」とも言われ、語り太夫・三味線・太鼓・拍子木の各一人と、人形遣いは、男人形を一人で、女人形は二人で操り、語りや人形の動きもやや単調で素朴なのが特徴である。

文弥節は人形浄瑠璃創始期の原形をとどめた古浄瑠璃と言われ、日本では、新潟県佐渡市・石川県白山市・宮崎県都城市・鹿児島県薩摩川内市の4県だけに残されている貴重なものだといわれている。

演目は『源氏烏帽子折』の中の、初段「卒塔婆引き」、二段目「常盤御前雪の段」、三段目「鞍馬下りの段」が演ぜられている。

【奉納・披露】

日程：毎年7月・11月・2月の最終日曜日 10時40分開演

場所：東郷公民館ホール（東郷町斧淵）